

ハマグリ母貝の保護手法の検討

浅海干潟研究部 諸熊 孝典

はじめに

本県のハマグリは、昭和49年には年間5,855トンを漁獲されるなど、県の重要な水産資源として国内有数の漁獲を誇ってきました。しかし、年を経るごとにハマグリの漁獲量は減少し、現在は年間100トン以下にまで減少しました。

このことから、ハマグリ漁の復活を目指して、漁業者が主体となり休漁期間や保護区の設定等の資源管理が実施されています。

水産研究センターでは、ハマグリ母貝をできるだけ多く守ることで、ハマグリ漁の復活の一助となるよう、母貝の効果的な保護手法を検討するための試験を行いました。



試験に使用した標識ハマグリ

試験内容について

■ハマグリの特徴について

ハマグリは、自ら干潟を移動することが知られています。水管の周りの粘液組織からヒモ状に粘液を分泌し、ヨットの帆で風を受けるようにして、その粘液で潮流を受けて海底を滑走します（図1）。

そのため、ハマグリの保護を行うためには、ハマグリの移動を制限する必要があります。



図1 ハマグリの粘液

■検討したハマグリ母貝の保護手法について

ハマグリ母貝の移動を制限できるよう、緑川河口域の漁業協同組合及び漁業者と共同で、干潟上に被覆網、土のう及びカゴを設置しました（図2）。

各保護手法の材料は、簡単に作れるように、ホームセンター等で購入できる部材や漁業者に身近な漁具を使用しました。たとえば、被覆網にはノリ養殖に用いるノリ網の中古品を使うことで、安価かつ簡易に設置できるよう、工夫しました。

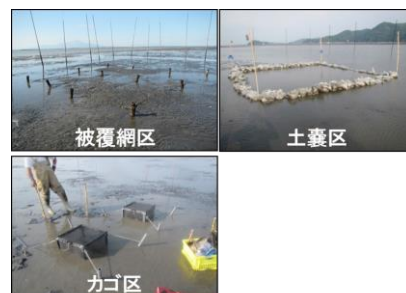


図2 各試験区の様子

■各保護手法ごとの保護効果について

平成29年10月に、ハマグリ母貝を各保護手法ごとに放流して、その後の残存率を調査しました。平成30年1月時点で、被覆網の残存率がもっとも高くなりました(図3)。

被覆網によるハマグリ母貝の保護効果を確認するため、図4のような室内実験を行いました。ハマグリ母貝の粘液が被覆網に引っかかり、その場に留まることがわかりました。

これらのことから、被覆網はハマグリ母貝の移動を制限する、かつ移動してきたハマグリ母貝をトラップする効果が考えられました。

また、土のうやカゴは付着物や埋没が頻繁にみられ、メンテナンスの手間がかかることから、被覆網による母貝の保護が適切であると考えられました。

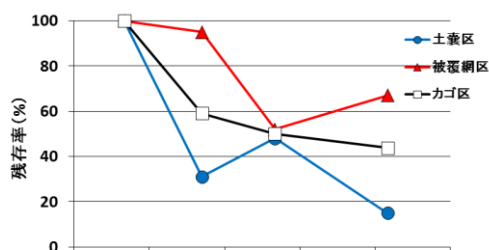


図3 各保護手法の残存率の推移



図4 ハマグリ母貝室内実験の様子
左上図：実験区概要
右上図：被覆網にトラップされたハマグリ母貝
左下図：被覆網についての粘液

今後について

保護手法の検討結果から、被覆網によるハマグリ母貝の保護が適切と考えられましたが、今回の試験期間は4か月間と短く、被覆網の面積は36㎡と小規模でした。

実際の保護区運用では、より長期的かつ大規模な被覆網の設置・管理が求められます。今後は漁業協同組合及び漁業者と共同で実証試験を実施し、被覆網による保護手法を確立することで、ハマグリ資源回復に寄与したいと考えています。



図5 緑川河口域におけるハマグリ漁の様子